

草庵仏教

第203号
(発行日)

2007年5月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月第一と
第三木曜日午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

宿業の身とお念仏

真宗の教えを聞かせていた
だくと私たちは宿業の身であ
るとお聞かせいただく。過去

の業という、この世に生まれ
る前を含んだ過去の私の行い
の結果が現在の私になってい
るのであると。そうすると、
今日という性格とか性質とか
個性というものも宿業の身で
あるという意味内容の中に入
っている。

それゆえ宿業の身というの
は単なる性格や個性というの
とは違って、自分の性格ない
し性質は誰のせいでもない自
分自身の過去の行いが作り上
げてきたのであるという自己
責任の意味がある。

儒教では「天の命、これを
性という」といって、それぞ
れの人の性質は天（神とか自
然）の命ずるものといわれる
が、それと宿業の身とは、似
ているがやはり違う。

宿業の身として先ず（煩惱
具足の身）であるという誰し
もの性質がある。凡夫である

かぎり食欲とか瞋恚とか愚痴
といった煩惱をもてる身であ
る。

しかし同時に、一人一人の
違いがまた宿業であるとい
う。煩惱の身であることには
変わりはないが、それぞれが
特殊性、個性をもっている。
人それぞれの「たち」（性）
というものがあがり、これを含
めて宿業の身と教えられてい
る。

すなわち同じ煩惱具足の凡
夫であっても、聡明な人もあ
れば愚鈍な人もある。心の優
しいタイプの人もある、か
ならずしもそうでない人もあ
る。忍耐力のある人もあれば
辛抱心の乏しい人もある。努
力するタイプの人もある、怠
けタイプの人もある。なにご
とも几帳面な人もあればルー
ズな人もある。なぜ違いがあ
るのか、それは個人個人の宿
業のゆえにと説かれている。

ただ気をつけなくてはいい
ないことは、仏教は仏になる
教えである。我が身の上に教

えを聞かせていただく上で宿
業の身ということが教えられ
ているのであって、それを離
れて、何か人間分析や人間評
価をするためとか、性格判断
などの為にいわれることでは
ない。一人一人が仏の教えを
聞かせていただく上で我が身
を宿業の身と教えられるので
ある。

それゆえ宿業の身とは、ま
ず第一に我が身のことなので
あり、（過去の業によって私
は私自身を変えることが極め
て難しい存在だ）という自己
の限界を知らせていただくの
である。

私たちには、自分が何年た
っても、自分以外の人になれ
ないという悲しみがある。若
いときから「ああ生きなさい」
「あの人のように行動しなさい」
「などとお手本はたくさん
見せられたが、お手本通りに
はいつまでたつてもなれず、
私は私でしか生きられないの
であり、自分は自分のするよ
うにしかできない。

ギリシャの思想家であるヘ
ラクレイトスが「運命は性格
にあり」と言って、自分がど
ういう人生を歩み、どういう
運命をたどるかという、その
要因は自分の性格であると言

うが、確かにそうだとかなず
かざるをえない。

ただ自分は自分のするよう
にしか生きられず、行えない
人間であり、しかも煩惱に縛
られて「どうしてみようもな
い人間」であるけれども、そ
ういう人間にお念仏が与えら
れているのである。

お念仏によって、「生まれ
つきのこのままの私が阿弥陀
仏のお心に受け入れられ、こ
の私として生きること許さ
れ、今ここに私として生きる
場所が与えられていること」
が実に有難いのである。

法然聖人が「念仏もうす機
は、生まれつきのままにて申
すなり。先の世のしわざによ
りて、今生の身をば受けたる
ことなれば、この世にては
えなおし改めぬことなり」と
教えてくださっている。

そんな私どもにお念仏は、
宿業のままなる人生がそのま
ま浄土に至る道になってくだ
さる。お念仏によって、宿業
に限定された私の人生も大悲
に包まれての人生となる。

宿業の身が己の業道を歩む
まま、浄土への道を歩まして
いただけるのはお念仏の徳に
よってである。（了）

真宗問答(三十四)

第二十願その二

(第二十願文)

たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞き、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずんば、正覚を取らじ。

(現代語訳)

わたしが仏になるとき、すべての人々がわたしの名を聞いて、わたしの国に思いをめぐらし、さまざまな功德の本である名号を称えることを積んで、心からその功德をもつてわたしの国に生まれたいと願うなら、その願いをきくと果たしとげさせましょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

D 「第二十願のお心をもう少し述べてみたいと思います。先月号に、十九願の道にいきづまり、そこに第十八願の念仏往生の願を聞かせていただいても、なお自らをたのむ心

(自力の執心)にさえられて

弥陀の本願を疑い、疑いながら念仏を称えて助かろうとする。それが二十願のすがたですが、それを阿弥陀仏はちゃんとすでに知っておられ、そういう自力疑心の者もお見捨てず、本願力にてやがておのずから真実信心に帰入せしめたいと誓われたのが「果遂の願」といわれる二十願のお心であるといわれます」

J 「我が名を称えよ」という第十八願である念仏往生の願を聞いても、まだ自力をたのむ心があつて「称えさせれば助かる」という風に受け取り、我が称える念仏の功績を頼みにしてしまふ。そういう状態は二十願のすがたなのですね」

D 「ええそうです。私たちは自分が助かりたいために、諸善・諸行を行います。例えば本を読んだり、先生方のお話を聞いたり、内観したり、内省したり、いろいろ努力するのですが、道がなかなか見え

ない。そうしてもう何をしてもダメとなつてくる。そういう時、「我が名を称えよ」という十八願の仰せを聞くこと「称えさせればいい」

とお念仏の行にとりつくのでは。実は「我が名を称えよ」との第十八願の仰せは、「まゝるまゝ汝を助ける」という救済そのものの言葉なのです。しかし、その救いたもう大悲のお心をただけで、「称えればかり」という行だけを受け取つて、行ずることによつて未来に救いを期待しようとするのです」

J 「法を求めて助かろうとするのですが、やがて自分の努力も工夫も間に合わなくなつて、お念仏を行ずることによつて打開しようとするのですね」

*

D 「自分の力を尽くしていくのですが日暮れて道遠して、自分の力の限界が知らされてきます。そのように救いの道がもうなくなつてくると、自分に歩める道として、お念仏を称えていくばかりの道に出ていくようになっていくのではないのでしょうか」

J 「私たちの側からなし得る

最後の道は、称名念仏一つになつてしまふのではないかと いわれるのですね」

D 「ええ私はそう思います。これはどれほど心がつまつてもできる行だからです。そういう意味では人間の側から行けるのは二十願までです。第十八願は人間の側からつかむことはできません」

J 「人間のできるのはつまるところ、念仏申すばかりの道になつていくのですね」

*

D 「そう思います。それについて、もともと法蔵菩薩様が称名念仏を選択されたのは、称えやすく保ちやすい行だからという意味があります。それは私たちに起こる苦悩や不安や悪心を縁としてそれを仏縁に転換し、ついには仏心にあわせてやりたいとの思し召しから称名念仏を私たちに与えてくださるという、そういう意味もあるだろうと思ひます。いろいろな縁で心がつまると、それを念仏助縁にしてくださるのであります。それは煩惱を縁として念仏申す、そこに大悲の心を知らせんがためでありましょう」

J 「そうすると、信心というものがわからなくても、苦し

んだり不安になつたりするところにもナムアマダブツとお念仏を申していくことが阿弥陀仏のお心に触れているのですね」

D 「ええ、名号は仏心大悲の結晶ですから、これを称える時、その時はわからなくても大悲に触れていることになり、やがて大悲に気がつかせていただくようになるのでしよう。藤原正遠師が

いづれにもゆくべき道のたえたれば

口割りたもう南無阿弥陀仏

とうたわれ、またしばしばどうにもならねば我が名を称えよ」との仏様のお心のままにお念仏を申しなさい。

と申されていました」

J 「二十願は「どうにもならねば我が名を称えよ」というお心といえるのですね」

D 「ええ、いきづまっています。今、称えることが出来ます。心がつまっている今、称えることが出来ます。起こる心のままに称えることができま

す。そこにほっと一息つけるのです。しかし、まだ如来の大悲が通つていませんから救いが実感できないのです」

J 「我が名を称えよ」という法は二十願で受け取るとそ

ういう意味になるのですね」

*

D「ええ、そうしている中で、名号にこもっている大悲のお徳が現れて、自力の心を離れしめて、第十八願に帰せしめて下さるのです。それを「果遂の誓い」と申します。御和讃に

定散自力の称名は

果遂のちかいに帰してこそ

おしえざれども自然に

真如の門に転入する

(称えて助かるうというよう
な自力にとらわれている称名

の人も、阿弥陀如来の、遂には
は眞実報土に往生させたいと
の誓いの中に入っているか

ら、誰が教えるということが
なくても、自然と第十八願の
他力念仏に入るのである)

と宗祖はお教え下さっています
す。お念仏を自力で受け取っ
て称え続けていく中で、とや

かく教えなくても、お念仏に
こもる大悲の願力のはからい
によって自ずから眞実の門

(眞実信心)に入らせていた
だけるのであると申されてい
ます」

J「ということとは、称えてい
る念仏が自力であるとか他力
であるとか詮索せず、一筋に
聞法し念仏を称え続けていく

ならば、自分が自力的に称え
ていても、称えられる念仏に
こもる願力の働きで、おのず
から眞実の信心に転入させて
くださるのでですね」

D「そうなんです。称えてい
る心は自力であっても、称え
られる名号は阿弥陀仏から与
えていただいている大悲大悲
の名号です。その名号にこも

っている仏の慈悲大悲のお心
が凡夫の心に届いて自力をひ
るがえして下さり本願他力

をたのませてくださるので
す」

J「名号には大悲大悲の仏心
がこもっているのですね」

D「ええ、称名念仏を選んで、

これでもってどんなものもも
らさずさわりなく救わずには
おかないという念仏選択の大

悲がこもっているのです。こ
の念仏選択の願心が凡心に届
いて、眞実信心となつてくだ

さいます。ここのとてころを聖
人は『信巻』に
信樂を獲得することは、如来

選択の願心より発起す
と仰せになっています。また
この心(信心)すなわちこれ

念仏往生の願より出でたり

とも仰せになっています。念
仏往生の願の仰せである(我
が名を称えよ)の一句の中に

広大な願心が表されているの
です。十八願の念仏往生の願
である(我が名を称えよ)を
聞いて念仏しても、広大な大

悲の願心に気がつかず、称え
る行ばかりをつかんでしま
うのが二十願ですが、称えなが

らお念仏のいわれを聞法して
いくところに、(我が名を称
えるばかりで助ける)とまで

仰せ下さる無窮の慈悲が響い
てくださるのです」

J「本當に阿弥陀仏の慈悲は
至れり尽くせりですね」

*

D「このことは称える名号に
私たちの疑い心を破る徳がす
でに用意されているともいえ

ましょう。それを聖人は『淨
土文類聚鈔』に
万行円備の嘉号は障りを消し

疑いを除く。
と申され、名号には私たちの
疑いを除く功德がこもってい

ると仰せられています。それ
ゆえ
末代の教行、専らこれを修す

べし。

とお勧め下さるのです。また
宗祖の『化身土巻』(萬延寺
本)には
専修といふはただ仏名を称念

の心を離れしめる働きがある
ことを述べておられます」

J「そうすると、私たちは念
仏し続けながら念仏の心を素
直に聞かせていただくばかり
ですね」

D「ええ、人間の出来ること
は、聞法しながら念仏を続け
ていくばかりです。他力の信

心は人間の側からつかむこと
は出来ません。阿弥陀仏から
与えられるものです。江戸時

代の終わり、神尾のおこうと
いう女性がいて、明師といわ
れた香樹院師に深く帰依し、

常随じょうずい眠近みんぢんして聞法せられたけ
れども、どうしても信が獲ら
れなかつた。そこで師は次の

歌を書いて与えられました。そ
の歌とは
念仏の声だに口にたえせずば

御名よりひらく信心の花
です。これは二十願の念仏の
果遂のお徳をよまれた歌だと
思います。念仏の中に信心い

わば仏のまこと(大悲の願心)
がこもっており、それが凡夫

の心の上に開き流れて信心の
花となつてくださるとのお心
でありましょう。お念仏を称
えなくても信心をいただける

上品の人もありましょうが、
愚鈍の下の品のものには称名念
仏を与えて、それによって信

心を得しめようとの大悲のお
手立てが用意されているので
はないでしょうか。聖人は

信心のひとにおとらじと
疑心自力の行者も
如来大悲の恩をしり

称名念仏はげむべし
とも和讃され、ご消息にも
往生を不定におぼしめさんひ

とは、まずわが身の往生をお
ぼしめして、御念仏さうろう
べし。

と申されて、信心がいただけ
ない自力疑心の人はよくよく
念仏を申し、如来のご恩の深

いことを知ってくださいとお
勧めになつておられるのであ
ります。これも二十願の果遂

の誓いのお心とうかがいま
す」 (了)

《念佛寺同朋会》

六月二十二日(金) 午後二時始まり

ご講師・西源寺住職 東岡繁師

信心夜話

〔求法用心集〕より

「一蓮院、時に七十歳、後生を大事とて明信寺の宅に至る。この時、明信寺曰く。

「今まで聞いたる事に聞き足すなり。それで決定の信はなきなり。今までは凡心なり。その外に御恩をいたゞいて、往生を決定するのぢや。」

また曰く

「多くの人が、これまで聞きこんだことを信じて居る、まことに大事の処、聴聞といふは、今日ばかり今日ばかりと聞くのぢや。」

*

一蓮院師が七十才にもなられたとき、自分の後生の問題で、明信寺という信心の厚いお方を訪ねておられる。後生の問題は信・不信にかぎらず、一生涯念仏聞法を続けていくものである。ことに一蓮院師は少しでも後生の問題について不審なところがあると明師の処に行ってお聞かせをいただいた方で、そういう謙下の徳ある師なればこそ、多くの門信徒から敬われたお方であった。

その時、明信寺師が

「今まで聞いたる事に聞き足すなり」と云われた。これは仏法を聞く場合、仏法を聞いて聞いてと、聞いたものを

積み立てていこうとする、聞いて仕上げていこうとする、聞いて聞き足していこうとする、それを批判されているのである。聞いてだんだん分かつて、納得しようとかかるのである。私の心すなわち凡心に仏法を聞かせ聞かせて、だんだん凡心を仏法化させて助かろうとするのである。「多くの人が、これまで聞きこんだことを信じておる」といわれるのがこれである。仏法を学んで、その内容を了解し、学んだ内容を信じようとするのである。

なるほど、仏法の聞き始めは、とにかく仏法を聞いて分かることが大事である。聞いてよく考えることは大事であるが、本願を信じる信心の一段は、いままで聞き込んだ内容や教義の集積をたのみにするのではない。今まで聞いたことを当てにするのではない。今の心に今新しく聞くばかりなのである。いつまでも相も変わらぬ今の凡心ばかりのところは、今、今の凡心に仰せ下さる仏心を聞くのである。仏法聞く前と変わらぬ今の凡心に南無阿弥陀仏はどう仰せ下さっているのかを聞くのである。それで「その外にご恩をいただいで往生を決定するのぢや」といわれるのである。

仏法を聞いて、おぼえて、分かったことを積み重ねて、それを力にして助けていたただくのではない。聞く前も、何十年聞いた後も、いつまでも変わらぬ、どこまでも助からぬ凡心に、今かけてくださっている如来のご恩を聞

くのである。ご恩をいただくとはご恩を聞かせていただくことである。〈助ける〉、〈まるまる引き受ける〉、〈必ず浄土に生まれさせる〉という大悲の仰せを聞くのである。〈我が名を称えよ〉と仰せ下さる情けを聞くのである。

(了)

《住職雑感》

四月・五月は暑からず寒からずで外に出て気持ちがいいし、花も緑も目を楽ませてくれる。老齢になってくると、一日一日が名残惜しい。浄土は清浄にして安楽なる領域で光明世界であるから、月日のたつていくのは浄土に近づいていくことになり有難いのであるが、この世への愛着はやはり強い。

さて、最近、憲法改正論議が盛んで、自民党は〈改正〉に積極的に押し進めようとしているようである。こういう問題にどう考えていいか。愚かな自分にはどう考えていいか。戦後日本が平和でこれたのは今の憲法が規制しているからではないかと思う。アメリカに押しつけられた憲法だからというが、憲法が優れた内容ならそれを受け入れたことそのことは悪いことでは無いと思う。また今の憲法は現実と合わないからといわれるが、現実世界はたいはいはい状態ではない。その状態に合わせようとすると、現実追認ばかりになり現実を革新してよりよい状態に変えることはますます遠ざかることにならないか。

たとえば今日核武装しようとする国が増えてきているという現実に合わせてために憲法を変えて核武装できる国にしていく様な方向に進むのか、そうではなくて今の憲法の理念により近づくべく日本は核武装は決してせず他国の核武装化を止めるようにしていく方向に進むのかといった問題としても考えられる。

憲法は現実よりも一歩も二歩も理想的なものであればこそ、現実を憲法の理念に合わせていくようにしようという目標になりうるのではなからうか。そういう中で現実はどう対応するか。それは今の憲法の範囲の中で何とか善処して対応できないものであろうか。

五月の末にはかつて東本願寺に勤めていた同僚たちとの集まりが北海道で予定されている。同僚といっても私より皆先輩である。初めての北海道への旅となるので少し楽しみである。集まりの趣旨は今年親鸞聖人御流罪になられて八百年の年になるので、そのことに思いをいたそうという会合である。聖人の教えは流罪（越後遠流）という苦難をくぐって庶民の宗教に血肉化したと云われている。もし京の都だけにおられて崇められての生涯であれば、真宗は高貴な教えであっても庶民の仏教にはなれなかったであろうと先師より聞かせていただいたことが

【電話相談室】

(秘密厳守・匿名可・無料)

(時間)

午前8時より午後10時まで

(電話)

0798-20-2112

(相談内容)

人生上のいろいろな悩み・

信仰上の相談・仏事の相談

*相談員が留守のときがありますので
予めご承知ください。